



女相撲



どろんこサーフィン



3年ぶりに復活!!

大正中津川 どろんこ運動会

7月16日、どろんこ運動会が3年ぶりに復活し、選手約40人と観光客やカメラマンをあわせ100人以上が大正中津川の集落活動センター「こだま」前の休耕田に集まり、笑い声と歓声が響きわたりました。

このどろんこ運動会は地区運動会に代わる夏のイベントとして2004年から始まり、今回で12回目となります。古い放水ホース製のまわしを締めた力士が泥の土俵で真剣勝負をする「男相撲」、「女相撲」。プラカードとバトンを手に持ち泥のコースを激走するリレーなど競技はどれも迫力満点で、優勝チームには木製の大きな手作りトロフィーが授与されます。

今回の優勝は町内外のバレーボール愛好家で作る「CAT」。毎年どんなチームが参戦するか楽しみな、元気な集落の名物運動会の復活でした。



男相撲



リレー



ドッジボール



綱引き

季節の風景 9月

秋隣

秋の気配をすぐそばに感じるという意味の夏の季語です。本来は、立秋に入る前の言葉ですが、暑いさなかに時折吹く涼風こそ、秋の最初の気配かもしれません。

松が根に小草花さく秋隣 正岡子規



季節を表すのにふさわしい言葉は、俳人の感受性と日本語の豊かな土壌から生まれました。万葉集の昔から育まれてきた日本人の感性と細やかな表現力には驚くばかりです。鳥や虫の鳴き声や雲の形、草木の色や風の温度の変化を見つけては、「小さい秋、見つけた」と心あるままに伝えてみるのも素敵ですね。ネットの世界に飛び交う言葉の乱暴や粗雑さ。ネット上の書き込みで、わざと人を怒らせたり、会話をかき乱したり。その書き込みの人气が高まるにつれて質の悪い他者のコメントは避けられず、荒れゆくコメント欄の管理はますます大変になっていく。そういった近頃の風潮を感じずにはいられません。言葉の貧困や感受性の枯渇と言われている現在、日本語が本来持っている豊かな表現力に、もっともつと目を向けたいものです。

今月の

人オムリ

習ったことをひとつでもいいからお家の人に教えてあげてね!



あきた ちえこ 秋田 知恵子さん (金上野)



▲土曜日学校の子どもたちはとっても前向き!

窪川小学校「土曜日学校」の先生その三。今回は「手話」の先生・秋田知恵子さん。秋田さんが手話と出会ったのは46歳の時。きっかけは、車いすの介護ボランティアをしていた時に「ひまわり号運動」に参加したことでした。「ひまわり号運動」というのは、車いすが通れない改札口や、階段ばかりの駅の構造、障害者が使用できるトイレがない駅舎、狭いドアや段差のあるホームなど、障害者が自由に列車に乗って旅ができない現実のなかで「障害者だつて旅に出たい!」という願いを実現するた

めに始まった市民運動で、1982年に東京を皮切りに全国に広まりました。その「ひまわり号」が高知に来た時に秋田さんは、初めて手話と出会いました。「実は、恥ずかしいお話なんです。それが、手話を見たことがないどころか、手話という単語すら知らなかったんです」。そこで秋田さんは衝撃を受けました。声を出さず手を動かしながら、実に楽しそうに、また表情豊かにコミュニケーションを取り合っている二人を見たのです。手話というものを知らなかった秋田さんは「何をしているのかな?」と思いました。何かのコミュニケーションであることはわかったのですが、それが「会話」であることはその時すぐにはわからなかった。二人の表情が豊かで、本当に素敵だったことが、秋田さんの胸を打ちました。そんなことがあって、秋田さ

んはすぐに社会福祉協議会にあつた手話サークルに通い始めました。さらに、高知市内で行われていた手話講座にも5年間通いました。習い始めた時は、聴覚障害の基礎知識から入り、少しずつ日常会話ができるようになりました。「一般的な言語は、生まれた時から自然に習得したのですが、手話はあえて覚えていかねばならない言語ですので、習得が難しいです。途中であきらめる方もたくさんいらっしゃいます」。秋田さんは、県の通訳者試験に1回でパス。平成12年から指導者としても活躍されています。土曜日学校の子どもたちはとても前向きに取り組んでくれるので、子どもたちを通じて、少しずつでも手話が広がっていくことを願っている秋田さんです。